

安田正治氏（元大平幹事長秘書）に聞く

宏池会会長の交替劇

―聞き手・編集委員



62歳の誕生パーティーで、「北帰行」を唄う大平正芳宏池会会長と安田正治秘書（右端）（1972年3月・三田の華都飯店で）

前尾幹事長の秘書になる経緯

——安田さんは、京都新聞の記者から前尾繁三郎・自民党幹事長の秘書になられ、のちにそのもとを去られて、宏池会で政策を担当され、大平正芳政権を支えられる、という特異な経歴を持たれた方だと思う。いわば、前尾、大平両氏に仕えられたわけだが、どうしてそういうことになったのか、というあたりからお伺いしたい。

安田 それには、まずなんで私が前尾さんのもとに馳せ参じたか、からお話しないといけないと思います。昭和三五年（一九六〇年）の選挙で支持を得た池田政権は翌年七月の改造で、池田さんの若い頃からの大蔵省の後輩で親友の前尾さんを幹事長に据え、官房長官は大平さん、党経理局長は宮澤喜一さんという自前の体制を固め、政局の運営に当たろうとしていました。ところが、肝心の前尾さんが改造直前になって、体の不調を訴え、「医師から幹事長の激職に耐えられるか責任は持てないと言われた」と言いだし、思いもかけない暗礁に乗り上げてしまう。前尾さんの病状を心配し、この最終診断を聞くため、大平官房長官は自宅の裏の塀を乗り越え、新聞記者の目をくらまして国立病院に駆けつけたりしました。大平さんが「前尾さんが幹事長に座ってくれなければ、この人事構想はやり直しになる。なにもしなくともいいから、幹事長の椅子に座ってくれ……」という池田さんのたつての希望を伝えると、医師団は「三カ月間だけなら責任を持ちます」という苦渋の決断をしたのです。この時点の池田首相を取り巻く人間関係の位置づけは、池田さんの横にちよつと下がって前尾、池田の真下に大平、その横に黒金（泰美）、宮澤といった構図で、党人の鈴木善幸さんは池田を取り巻く

円周の直ぐ横にいたといえるでしょう。

——そして前尾幹事長が実現するわけですね。

安田 健康上の理由で幹事長就任は見送りになったと情報を得ていた私に、自民党の三役決定の前日の七月一六日の夜、前尾さんの吉田秘書から電話があったのです。「幹事長問題の情勢が変わったから、明日の朝五時半か六時までには松濤の前尾邸まできてくれないか。詳しくは言えないが、やるようになるかもしれない……」という内容でした。翌朝、指定どおりの時間に前尾邸に行くのと七時過ぎに前尾さんが着物姿で入ってきました。八時近くなったとき電話が入り、前尾さんは廊下の電話口で「はい、はい、分かりました。はい、承知しました」と神秘的な受け答えをしているのです。電話が終わると前尾さんは玄關脇の小部屋に入り、私を呼びました。三畳の小部屋に座ると、いきなり「安田君、今度、幹事長をやることになった」と言い、私が「大役ですね。おめでとうございます。できるだけお手伝いしますよ」と挨拶をすると「できるだけでは困るんだよ。全力でやってくれないか」と言うのです。「全力というと幹事長秘書をやるのですか」と聞き返すと「そうだ、頼む……」という返事なのです。思いもかけない申し出に「会社の了解を取ってください。了解があればやります」と即答したのです。

——断る考えはなかったのですね。

安田 私には前尾さんの申し出を断れない二つの理由があったのです。その半年前、私は京都新聞のワンマン社長の白石古京氏から「社長秘書課長をやってくれ」と直にいわれ、一身上の理由を楯に逃げ回っていた人事から逃げられなくなっていました。当時三五歳の私は、両親が病身であり政治記

実者がやっと面白くなってきたところですよ。いかにワンマン社長が「将来はワシが責任を持って役員教育をやるから、やってくれるか」と言われても、東京生まれで、根っからの下町っ子である私が秘書課長になるということは、編集から総務部に鞍替えし、京都に住居を移して新聞経営の道を歩むわけです。そんなことは、思っても見ない人生コースですし、本音は京都になんか行きたくない。そこで、窮余の一策として親しくしていた前尾さんに頼み、社長に直に電話してもらった。これでいったんは辞令が出ていた秘書課長は免れたが、会社の幹部一同からは、「会社始まって以来の不祥事」と叱られました。このときの借りが一つ。

それと、政治記者として外から想像で描いてきた政界の内幕をこの目で見てみたいという誘惑もありました。こんな事情が前尾さんへの返事になった。ところが、前尾さんは私の条件に「分かった」と引き取ってしまった。それで、その瞬間から私は新聞記者から幹事長秘書に変身したのです。その日、前尾さんは白石社長に「安田君を貸してくれ……」と電話して了解を取ってしまい、私は「幹事長秘書が済んだら、必ず社に戻ります」という一札を書かされて出向したのです。

——そうして幹事長秘書として、報道陣と応待したり、各派の議員や池田派の派内調整に当たるわけですね。

幹事長秘書として見てきたこと

安田 幹事長室は情報の交差点ですよ。多くの人が出入りする。院内の幹事長室の隣は平河クラ

ブ（自民党記者クラブ）であり、各派担当の記者が立ち寄っては雑談し、情報を入れてくれる。こうした情報の流れの中になると、党内が今どちらに動いているか見えてくる。これらを総合しますと、旧岸派勢力が池田批判の方向で動く気配を見せ始めたという感じがする。これに対し、大野伴睦、河野一郎ら、かつて池田に敵対した党人派勢力が、こちらに好意を見せ始めている。こういった動きが昭和三十七年の二月の情勢でしたな。

その頃、もう一つ気になる動きが池田派内部に見え始めていました。これまで、池田派を代表するのは、官房長官の大平さん一人でした。ところが、池田の兄弟分に当たる前尾さんが幹事長となり、党運営の要に座って重きをなし始めると、黒金さん、宮澤さんといった池田側近が幹事長の前尾さんの周りに集まり始めた。何事を相談するにも頼りがいのある兄貴分です。集まってくるのは良いが、前尾さんを梃子に官邸の大平さんに対抗しようとする空気が感じられたのです。私はこの空気に漠然とした不安を感じて、官邸の伊藤昌哉秘書官に池田の足下が大平と反大平に割れる恐れを訴え、注意して見守るよう話しましたが、伊藤さんは、「そうだな……」と返事はしたものの、あまり深刻には受け止めていなかったようです。

——その流れが、三九年七月の池田三選後の人事となってくるわけですね。

安田　そうです。公選後の改造で内閣の表舞台から去った大平さんは、党三役入りを期待していました。一方、前尾さんは、これまでの慣例では党の三役を務めると労苦に報いるという意味も含めて入閣する、というのが普通でした。その意味では、幹事長の激務を三期つとめ、池田政権を裏から支え後顧の憂いなかからしめた前尾さんは、いかなる処遇をしても足りない重臣でした。しかし、臍胸

実の膿を週に最低二回は抜かなければ保たない身体の前尾さんは、なによりも激務から離れて休養したかったのです。組閣参謀を務める前尾さんから、大平さんは、三木武夫幹事長（三木派）の下で筆頭副幹事長で修行することを要求されたのです。副総裁には川島正次郎氏がつき、中村梅吉総務会長（河野派）、周東英雄政調会長（池田派）の主流派体制です。官房長官には前尾さんを三年にわたって筆頭副幹事長として支えた鈴木さんが抜擢された。池田内閣の黄金時代を支えた前尾、大平、黒金、宮澤ら側近グループは、いずれも閣外に出たのです。池田さんとしては、三選目の前半の中継ぎ体制として選んだ体制であったのだと思います。

——ところが三選を果たした池田さんが、ガンになって間もなく退陣する。大平さんは筆頭副幹事長として、池田から佐藤への政権交代の舞台回しにあたる。そして宏池会も池田さんから前尾さんへと代替わりするのですね。

安田 池田首相の退陣騒動が終わって暫くした一月中旬、病院に池田さんを見舞った前尾さんに対して、池田さんは「宏池会の会長を引き受けてくれ」と宏池会の存続を託したのです。その日、前尾さんは「池田君が宏池会を引き受けてくれというんだよ」と言い、「先生が派閥のボスをやるんですか」と私は幾分の危惧の念を含めて聞き返しますと、前尾さんは「そうなんだ」と託された重荷を思いやるような表情で、「やらざるを得ない、しかしこの身体だからな」と言っていました。

宏池会の存続と後継会長は異論なく前尾さんに決まったのです。しかも、多年、前尾さんの行動を制約してきた病患は翌四〇年冬の手術で取り除かれ、残ったのは糖尿と痛風だけになりました。前尾さんは「僕は毒物に強い」と言っつて、酒は毎晩一升、たばこはピースの缶入りを二缶あけるチェー

スモーカーでした。しかし手術を機会にたばこはやめました。吉田派池田系がそのまま結束を解くとなく一致して政局に当たるとは、派閥の変質を意味し、個人商店が株式会社に生まれ変わったといえるでしょう。

——昭和四二年一二月の佐藤総裁再選の時に、正式立候補はしなかったが、前尾票が四七票出ましたね。

安田 このころ大平さんは閑職でした。四一年の八月の改造に当たって幹事長として党務を任せられた田中さんは、大平さんに政調会長就任の話を持ってきた。しかし、この話は佐藤栄作の反対にあって否定され、大平さんはまた無役に置かれたのです。しかも佐藤首相は自分好みの宮澤さんの起用など、人事面における大平系と反大平系に色分けする宏池会分断の手法に出てきたのです。

当初、佐藤内閣は『池田路線の継承』を謳ったが、国会運営では「L・O条約や日韓条約の批准を強行し、建国記念日法案の強行採決をするなど、「低姿勢」の池田路線に対し、高姿勢の政治手法に転じていました。池田、河野、大野と怖い者のいなくなった佐藤さんに兄の岸信介さんの影響力が強く現われ、三役構成も旧岸・佐藤体制で中心を固める態度が露骨でした。このような党内にあって、総裁候補らしき者は、前尾宏池会会長しかいませんでした。

佐藤政治に不満を持つ宏池会の中から一二月の佐藤再選に対抗して立候補し、不満を表明すべきだという意見が若手の中心に強まり始めたのです。これに対し、佐藤さんに優遇されている議員から「佐藤派とは同根であり、まだ発足したばかりである。候補を立てて対立を表面化するのは好ましくない」という意見も出され、宏池会の意見は割れました。そのため、「立候補せずに前尾票を出す」

実という方針が固まったのです。これに対し前尾さんは「前尾票が多すぎると困る」と、前尾票を出さないよう説得しました。こうして、前尾票は四七票、他の批判票を加えると佐藤再選反対票は、三分の一を超えるという結果になったのです。

去 華 — 佐藤さんはなぜ大平さんを嫌い、宏池会の分断を図るような方策をとったのでしょうか。

佐藤総理に冷遇された大平さん

安田 政治家の関係を律する考え方に、「貸し借り」の関係があります。借りが偏りすぎると対等の人間関係より、親分子分の関係に移る。その意味で、借りは何らかの形であまり溜まらないうちに返すのが常識です。佐藤さんと大平さんの関係には、明らかにバランスシートに偏りが出ていた。これは佐藤時代七年八カ月に及ぶ特質です。何でそんな偏頗な扱いをしたのか、佐藤さんはなぜ大平さんを嫌い阻害したのか。私はその理由が分からず、政界の中枢に関わった人々に聞きました。いろいろな説があった。大平さんは、後に通産大臣の統投問題で煮え湯を飲まされたとき、池田満枝夫人に「私の後ろに池田さんの顔が見えるのでしよう」と答えたが、鈴木善幸さんは「佐藤さんは大平君に自分と同じ資質を見ていたからではないか」と言っています。新聞記者の中には、造船疑獄の際、池田さんが免れたのは大平さんの工作だと誤解したからだという人もあります。そのほかいろいろだが、私はやはり佐藤さんは自分の政権にとって、大平さんを一番危険な存在と見ていたからではないかと思えます。

——当時、大平さんは面白くない日々であったように思います。

安田 大平さんは、うち続く佐藤首相の冷遇にバランスシートの変調を感じ、心穏やかならぬものがあつたに違いないですよ。大平さんは佐藤内閣の実現に大きな役割を果たした。その一方の相手である田中さんが、大蔵大臣から党幹事長と日の当たる地位に起用され、福田さんとともに着々と地歩を固めているのに対し、池田退陣以来、満二年、表舞台で演技する役者たちを袖から見つめる心境であつたと思います。それは『旦暮芥考』の「浪人礼賛」の一文に書かれています。大平さんは「また好きな書物をあてどもなく繙いて、今人故人と秘かな対話を楽しむこともできる。政治の舞台で主役を演ずる人々の心理なり演技なりを、一定の距離をおいて鑑賞することもできる。悪口やゼラシーの燃焼する場所より遠ざかることもできる……」と書いています。ここにいう主役とは佐藤首相に重用される福永健司官房長官、宮澤経企庁長官らのことなのか、だれという特定の人ではなく閣僚や三役のことなのか。いずれにしても、やりきれない思いが伝わってくる一文です。

——大平さんのそうした心境はともかく、昭和四三年秋に佐藤首相は総裁に三選されます。前尾さんは今度は立候補するのですが、惨敗してしまうのですね。

安田 裏の事情はともかく、前尾さんと、三木武夫氏の二人が挑戦して佐藤首相の三選を阻止できなかったただけではなく、前尾さんは三木さんにも破れて九五票と最下位に落ちるのです。「争いは末節」が信条だといつても、自分はよいだらうが、前尾を支えてきた同志にとってはたまつたものではないですよ。佐藤三選問題で宏池会は全員、愕然たる思いに突き落とされたのです。池田内閣の退陣から満四年、政界の名門宏池会の威信が見るも無惨に飛び散った姿を客観的な票数で示されたからで

実す。これまで新人の入閣はただ一人、後は改造のたびに「一本づり」あるいは「牛蒡抜き」という派閥の意向を無視された人事が続くと、人事権を持つ会長の威信は著しく傷つく。それを毎度、繰り返えされたのでは、派閥の領袖の鼎の軽重を問われかねないということになります。佐藤三選問題で去前尾さんは、官僚のもっとも重んじるメンツを傷つけられた。「病院に入院したり三味線を弾いてるから、こういうことになるんだ」と仲間からも忠告され、一〇年以上続いた入院生活を引き払ったのです。そして佐藤四選阻止には、全力で当たると決意して、総裁公選出馬の準備に入ったのです。

——前尾さんは佐藤四選阻止へ向けて強い決意で臨んだのですが、結果的には立たずに三木さんだけが挑戦することになってしまいましたね。

佐藤四選阻止へ向けて三木氏が挑戦

安田 前尾さんは汚名挽回のため必死でした。昭和四三年暮れ、病院を引き払って家をもう一つ借り、体力の回復に全力を挙げていました。毎朝、明治神宮の表門が開けられる午前六時前には表門で待ち、砂利道の参道を急ぎ足で往復する。この日課を雨の日も雪の日も休まず続けたのです。前尾さんの心中でも、佐藤首相が四選に出馬するか否かは大きな問題でした。佐藤首相が出なく、しかも田中さんが独立してなければ、宏池会と田中さんは密かに提携できる。そのとき川島正次郎氏や村上勇、水田三喜男氏といった旧池田派以来の親しい勢力を結集すれば、福田さんや三木さんに勝てるという計算が立つ。これを胸に秘め、前尾さんは四五年の初夏から積極的に佐藤批判姿勢を打ち出し始め、

七月の宏池会青年研修会の席上、佐藤・福田の経済政策を鋭く批判し、四選阻止の出馬の意欲を示したのです。

一方、四五年夏、アメリカにニクソン大統領を訪ねた佐藤首相は、四七年の沖繩本土復帰の約束を取り付けました。佐藤首相は、岸、福田、保利茂氏らの四選を辞退して福田氏を後継者に指名してほしいとの希望は分かっていたが、「沖繩が帰らなければ戦後は終わらない」と言い続けてきた、戦後政治の大問題を自分が実現し自分の目でそれを見たい、という欲望を抑えきれなかったのです。

この夏、佐藤首相の心境と合わせるように、田中さんは川島副総裁、船田中衆議院議長、中曽根康弘運輸相、村上、水田等中間派をまとめて佐藤四選支持に回させた。ここにおいて、佐藤四選なしの前提で強い姿勢をとり続けてきた前尾さんは、秋口になると君子豹変して佐藤支持に廻るのです。これまで六年間で新人は小山長規、小川平二の僅かに二人、各派に比べ閣僚起用が大幅に遅れ不満がくすぶっている。ここらで派内のガス抜きが必要でした。人事面での優遇が前尾さんが佐藤支持に廻った取引条件でした。佐藤四選の外堀は埋まり、あとは三木さんが何票とるかだけが関心事でした。

——そして、ただ一人挑戦した三木さんが予想外の一一一票をとる。佐藤首相は四選直後の改造人事を見送る　ということ、宏池会の中で会長交代を求めるさわぎが起こるのですが……。

安田　佐藤首相は、自分の政治的偉業を全党の祝福のうちに完成し沖繩返還を飾りたかったので。そのため佐藤四選は、本来ならば無競争、満場一致で実現したかったです。しかし、巨大権力に挑戦する姿を執り続けることで、自分の政治的存在が高まることを知り抜いている三木さんが、立候補を取りやめるはずがない。佐藤首相は「三木を干し抜いてやる」と三木さんの得票を二桁に抑えるこ

実とを幹部達に指示していました。しかし七〇票前後と見られていた三木票は、蓋を開けてみたら前回の一〇七票を越して一一一票の高得票でした。その瞬間、党大会会場の文京公会堂内に一種のどよめきが起こったのです。三木氏が得意満面だったのに引き替え、佐藤首相は苦虫を噛みつぶしたような表情で不愉快さを隠さなかつた。

シヨックは前尾さんも同じです。屈辱を忍んで主流派への道を選択したのに、また裏目に出た。三木氏は男になつた。総裁選の後には改造です。そこに全てを賭けたのです。党大会の後には、首相官邸の庭で野外パーティーがある。「総理がお目にかかりたい」という呼び出しに出向くと、佐藤首相は一方的に「改造は延期したい」と言う。改造をやる気分がない、ということですよ。自分が考えている偉業を党はそれほど感心していない、というのが気に入らないわけですよ。前尾さんは、パーティーの庭に出て気を静めようとしたが、興奮で何をしているのか分からない状況でした。

——そこで宏池会の中で大平直系といわれる人たちが、前尾さんに対して、大平さんへ会長を譲るようにと迫る騒ぎが起こりますが……。

安田 前尾さんが宏池会で帰りを待っていた議員たちに呼び戻されると、異様に緊張した雰囲気です。佐藤首相との会談を聞いた幹部たちの間にも不快感が流れ、この報告を受けて宏池会は臨時総会を開くことになりました。臨時総会とは異例の事態です。大平系の伊東正義、佐々木義武、服部安司、田中六助、田澤吉郎、浦野幸男氏ら当選四回以下の若手が、こもこも立って会の現状を批判し、幹部の不手際を責めた。宏池会の所属議員にとっては、これだけはつきり公の場で批判すれば、脱会を覚悟の上の行動であつた。池田さん以来の名門宏池会に入会して、政権を目指して戦わない会なら、も

うつついて行けないというのが言い分でした。詰まるところ、前尾さんを初めとした宏池会幹部の批判です。この時、奥の部屋にこもった若手議員は「脱会を賭けての会長交代」を要求する連判状を手渡して、その上、「納得がいく返事を聞くまで、ここを動かさない」という強硬なものでした。この連判状に署名したのは一七名です。これに対し、前尾さんは「重大な問題なので私の進退を含めて、一月以内に回答する」と約束して、ひとまずこの場を納めたのでした。

——それから交代劇の長い幕が開くわけですね。

会長交代劇の長い幕が開く

安田 「進退を含め」という回答は、辞める気でない限り禁句ですよ。私は「しまった」と思った。この一言を吐くようでは非常事態です。傍観するわけにはいけません。翌日の午後、私は昔の池田派担当で前尾さんや大平さんと近かったNHKの島桂次記者を訪ねて状況を聞きました。島君は、待つたように、激昂する若手の状況を細かに説明し、「大平さんも押さえてるんだが、奴らはだんだんお父ちゃんの言うことも聞かなくなってきた」と案の定、中に入っているのです。「何とか納める手はないのか」と言うと、「俺もやってみるから、連絡してくれないか」ということで、連絡方法を打ち合わせた。若手を前尾さん自ら説得しようとするのは、火に油を注ぐ結果になりかねない。私は、島君に当時入院中だった私の病室の電話番号を知らせ、「火の手を大きくしないように協力しよう」ということで、その日は別かれたのです。

翌朝、私は朝の早い前尾さんの日課を考えて午前五時に病院を出て、前尾邸に向かいました。前尾さんは憔悴した様子で、「何でもよいから大平君の方と連絡して解決してくれ。君の姿や動きを知られるとまずいから、新聞記者のくる前にきてくれ。君は誰とも相談しないで僕にだけ話してくれ」ということだった。私は、「このような微妙な問題は、誰かキーステーションになる人物を置き、情報を一元化して処理に当たらないといけないのではないですか」と進言しましたが、前尾さんは、私のあげた全ての人物を否定して、「君一人が向こうと接触してくれ。誰も信頼できないので絶対に秘密で動いてくれ」と言つて承知しない。私は、そこまで追いつめられているのかと、暗然とした気持ちながら引き受けざるを得なかつたのです。

——舞台裏で安田さんが、島さんと連絡をとりながら収拾案を練ることになる……。

安田　そうです。島君に大平さんが若手を押さえられる条件を探ってもらつと、前尾さんの回答文の中に「宏池会の後継者は、前尾の後は大平であることを明確に謳ってもらいたい」ということでした。ところが次の会長を大平に譲ることをあまり鮮明にすると、前尾さんが死に体になり、宏池会の分裂の動きを加速することになる。そこで、前尾を死に体にしないで次は大平だと分らせるには工夫がいる。島君に「書け」と言つと「俺はだめだから君が書いてくれ」と言つ。ない知恵を絞つて一文をつくり、大平側に見せると「もっと鮮明に次は大平だと分かる表現にしてくれ」と注文がつく。これが強すぎると前尾さんが承知しない。やつと双方の合意する案ができ上がり、それではと、二人を会わせて、合意の確認の会談をセットし、合意ができたと聞いて安心してると、二人が別かれて二、三時間後に、前尾さんのほうから「あの案文ではだめだから、やり直してくれ」とこ破算になる。

そのたびに大平側に譲歩の交渉をやり直し、妥協案をつくって同意したところで二人を会わせる。また前尾さんのほうから駄目が出る。合意文書は三度目でやっとOKになりました。宏池会の運営にあり、会長を補佐する制度を発足させるとともに、前尾、大平双方が納得する委員会のメンバーの人選ができたからです。

——途中でいったん合意しながらご破算になったのは、なぜですか。何かハプニングでもあったのですか。

安田 前尾さん個人に見せたときは承知し、前尾・大平会談でも合意に達しながら、その後数時間でひっくり返ったのは、妥協案を前尾さんは不用意に車の中に置き忘れて、和田清好宏池会事務局長に見られるなど彼らの強い反対意見に動かされていたからです。それに、私だけがこの工作に関わっていたことが、彼らの疑惑を増幅していた。和田氏も私はキーステーションの一人に挙げたのだが、前尾さんが承知しなかったのです。私は嚴重に口止めされているので、弁解するわけにいかない。結局、大平側に「信頼感があれば表現は曖昧でも良いではないか。このたびのことは前尾さんに一切傷のつかない形で納めるべきだと思うので、譲歩してくれないか」と頼み、大平さんにも不満げな若手を説得して譲歩してもらい、一カ月前に決着がついたのです。妥協成立の力ギは五人委員会の人選です。大平、鈴木对小平久雄、小川平二の二対二に、参議院から塩見俊二氏を入れた。塩見氏が双方とも自分の支持者と勘定していたからです。もう一つは、五人委員会の筆頭に「大平正芳君を中心として」と振った点です。会談で合意が成立すれば、裏方の役割は一応、終わったことになります。

——それで交代劇が進行していくのですが、何か財界サイドからの圧力もあつたとか聞きますが。

財界サイドからの圧力はあった

安田 財界がらみで一つお話ししますと、その年の一二月の上旬になって、思いもかけない出来事が起こったのです。宏池会が名門と言われるには、幾つかの理由がある。官僚エリートの集団で、豊富な人材をそろえていること。戦後復興の初めから主導的な役割を果たした政治家の集団であることです。その意味では、後に田中氏が「何と言っても戦後時代はわれわれの社会である。戦後の苦しかったときに復興の背負いもせず、ただ評論だけしていた連中に、勝手なことをやられるのではたまらない」と非主流を批判したが、その思いは保守の本流の底を流れる感情であったと思います。この意識と同じものが財界にもありました。彼らは、池田派をこの共感を共有できる政界グループとして支持し、後援しようとしたのはごく自然な流れでした。

この財界の支援は、池田の亡き後も続いたのです。財界からの資金の太いパイプが、宏池会の名門と言われる背景でもありました。前尾さんが派閥の資金集めに走り回らなくとも大派閥を維持できたのは、池田さんからこの遺産を受け継いだからです。益暮れには、旧財閥系の企業の社長会との懇親会がもたれ、連帯を確認してきました。暮れには、三井の社長会や三菱の社長会との宴会がある。「今年も政治献金をよろしく」という、派閥の運営にとっては旦那との顔つきなぎです。宏池会のごたごたは決着した。あとは、会の財政さえ確かめれば、時間が治めてくれる という思いです。

この年の忘年会に前尾さんは期待を込めて出席しました。ところが、会の時間がきても、誰も出席

しない。待てど暮らせど誰もこないのです。すっぱかされたと分かったとき、前尾さんは血の逆流する思いであつたでしょう。

——誇り高い人物の前尾さんにとって許せない出来事でしょうね。

安田 その夜の九時過ぎ、私の入院先の病院のナース・ステーションに電話がかかってきました。ぐでぐでんに酔っぱらつた前尾さんが、支離滅裂なことを言つて私を責める。この日の昼間、私は前尾さんの車に同乗して宏池会に行きました。私の秘密任務ももう終わったことであり、一〇年ぶりの宏池会も見たいという気分もあつて、三〇分ほど事務所において、病院に帰つた。ところが電話口で、それつの廻らないほど飲んだ前尾さんは「社長たちがこなかつたのは君のせいだ」と言う。私には、この日、社長の連中と前尾さんが会うという日程も知らなければ、宏池会の財政のことなど関心もなかつたのに、「君が宏池会にきたからだ」と、くどくどとしゃべり責める前尾さんに、私は異常なものを感じました。それ以上に、あれほど酒の強い前尾さんが、それつの廻らないほど飲んだのも初めての経験でした。数日後の話によると、私が三井や三菱の社長連中を欠席させたと思ひこんだという話でした。私は呆れ返るばかりでした。

大平側との裏工作は、やれと言うからやつた。連日、午前五時には病院を抜け出し、朝食前に帰つてきた。どれだけ気を使い、話し合つたか。前尾さんに良かれと思う一心でやつたことで、妥協のできが悪いのなら、それも私の限界である。精一杯やつたことで、省みて恥ることはない。

しかし、この社長会の事件には只ごとではないものを感じました。誰かが工作しなければ、一流会社の社長が、長いつき合いのある前尾さんに、これだけ思い切つた背信行為はできるはずがない。後

実 には伝え聞いた話ですが、「われわれは前尾さんが総理になるといので、長い間お付き合いをしてきた。しかし、その気がないのなら、もう付き合うのは勘弁してもらいたい」という言い分であつたといふことです。これだけのことを彼らに言わせるとしたら、誰れかが音頭を取つたのではないか。誰れか知らないが、ひどい話ですよ。これで派閥のリーダーを続ける道は、財界人によつて絶たれたと言つて過言ではないでしょう。われわれが苦勞してまとめた前尾・大平合意は、なんであつたか。この年の暮れの餅代は、前尾さんが自分の資産を処分して工面したと聞きました。金銭に淡泊な前尾さんにも辛い決断であつたでしょう。

——そういう出来事は、はじめて聞く話ですね。しかし曲折はありましたが、翌年四月に、ようやく宏池会の会長交代にこぎつけるわけですね。

前尾・大平の会長交替が成立

安田 三月中旬、前尾・大平会談で合意されたとき、会長の交代は良好な雰囲気の中で進み、四月の会長交代にあつては、宏池会はみんなで協力して保守本流の道を歩もう」と誓ひ合つたはずですが、いかに理性的な良識の士であるうと所詮は血の通つた人間です。喉元過ぎれば無念の思いもあるだろうし、理性では収まりきれない棘もあるでしょう。それを、理性の支配する日頃の言動をそのままに信じ、君子の誓いがなされ、名譽会長と新会長として昔ながらの友情を保ちながら、何のわけだかまりもなく手を携えていけると思い込んだのが、私の人間的な未熟さでした。大平さんは『私の

履歴書』に、「この推移は表向き自然であったように見えるが、人間の心理はそのように機械的なものではない。私の不徳の致すところも手伝って、前尾さんの私に対する態度は、その後、硬ばったものになっていったし、宏池会自体もしつくりした団結を示すには至らなかつた」と書いています。大平さんも心を痛めていたようです。前尾・大平の和解に動いた鈴木善幸さんも傷ついた。双方に良かれと思つた行動も、事が済んだ後で、色目で見れば意図的に介入したと受け取られる。不用意に火中の栗を拾つた咎めです。お利口さんは、問題が片づくまで燃え盛る火の側に近づきはしなない。火傷をするのは馬鹿げているからです。

——安田さんは、そのあと前尾事務所を退いて、宏池会の政策づくりにたずさわるのですね。

安田 正直言つて、その頃の私の健康状態からいって政治の世界の仕事などはほとんど関心がなく、いかにして社会生活に戻るかということだけが問題でした。ただ、退院すれば仕事に就かなければならない。もともと前尾幹事長の秘書は「仕事が終わつたら社に帰ってきます」という念書を書かされたので出向です。数年前には元の京都新聞から論説委員で戻つてこないかという誘いがあったが、退院して直ぐサラリーマンの定職につく自信はない。職業も私にとっては社会復帰の一部に過ぎず、一、二年の訓練によって自信ができたなら定職に就きたいというのが、願望でした。そのため当面は自分の健康状態を見ながらやれるアルバイトが欲しかつたのです。

こんな、私の願望に島君から伝えられたのが、当時の宏池会機関誌『前進』の編集を手伝わないかという話でした。宏池会が新しくなれば、『前進』の役割も変わらざるをえない。島君から「前尾先生には、先生のお考えもあるだろうから、意向をよく聞いてきてくれないか、その上で編集の方針を

実話し合おう。何でもいいんだよ」というアバウトな話でした。

就　——それで『前進』の編集にたずさわったのですか。

華　安田　そうじゃないんです。四月下旬、パートナーとして福島正光氏を紹介され、二人で話し合った結果、前半は前尾先生の語源考など従来の方針、後半は新しい宏池会の政策や政治指針と大まかな区分で合意し、前尾さんの意向を伺いに新しくつくった前尾事務所に行きました。すると前尾さんは

「その話は和田君と話し合ってくれないか」と心なしかよそよそしい態度で、前の宏池会事務局長の和田氏に話し合つように求めたのです。ヒルの喫茶店で向かい合つと、和田氏は切口上で「君はどういう編集方針で『前進』をつくらうとするのか」と問いかけてきたのです。大ざっぱな方針を話し「前尾さんの意向もあるだろうから、方針は相談して決めていきたい」と答えると、「『前進』は前尾さんがつくったもので、あれは宏池会のものではない」と、剣もほろろな言い分なのです。私は『前進』について前尾さんと大平さんの間でどんな話し合いがなされたのか知らないのに、狐につままれなような思いで、その日は引き上げたのです。和田氏は仲間を見る態度ではなく、敵対者を見るような雰囲気だったと思います。半月ほど後、『前進』の編集は宙に浮いた形となり、私は社会生活に慣れるための日が続いたのです。「『前進』の編集について前尾さんと大平さんは話し合つたようですが、『前進』は宏池会には戻ってはきませんでした。こうして私と福島氏は、思いもかけず宏池会の政策づくりや、後には政略にまで組み込まれて行ったのです。

(本稿は安田氏の遺稿『戦後政治』(一九九八年一二月)の中から、主に宏池会会長交代についての部分に関して編集委員がインタビュー形式で構成したものです。)

宏池会会長の交代劇

安田正治（やすだ・まさはる） 一九二五年、東京都生まれ。
五二年東京文理科大学哲学科卒、五三年京都新聞社に入社、六一年前尾繁三郎自民党幹事長秘書、七八年大平正芳自民党総裁秘書、八年六月大平総理大臣秘書官、同年七月鈴木善幸自民党総裁秘書。この間、一貫して宏池会の事務局に所属する。九五年真鍋賢二参議院議員公設秘書となり、九九年二月に死去。